

【教員寄稿】

文学を通じたコミュニケーションのススメ

江口佳子*

初めまして。4月から非常勤講師としてリレー講義「ブラジル現代文学特講」を担当させていただきます。現在、静岡県にある大学でポルトガル語やブラジル文化の授業を担当しています。静岡県には多くの外国人が居住しています。中でもブラジル国籍を持つ人たちが最も多く、全国の在日ブラジル人約17万人のうち、静岡県は愛知県に次いで二番目に多く、県民人口あたりに占める割合は第一位となっています。大学には、小中学校の頃のブラジル人との交流がきっかけでポルトガル語やブラジル文化に関心を持った学生や、卒業後に外国人の生徒が多い学校での教職を希望している学生がいます。皆さんの中にも、そうした身近な経験や将来を考えて、ポルトガル語学科を選択した方々がいることでしょう。外国文化を知る上では、実際に住んだり、人々と会話することも重要ですが、書物や文学を通して、日常気付かない人々の考え方や国の事情・背景を知ることにも出来ます。

私は大学を卒業してから数年間の会社勤務を経て、メキシコの首都メキシコ市に住む機会があり、メキシコ国立自治大学付属の語学学校でスペイン語を学びました。現在私はブラジル現代文学を研究していますが、最初に出会ったラテンアメリカ文学はスペイン語圏のものでした。ある日、大学構内の循環バスに乗っていたときに、前の座席の男子学生が本を読んでいたの、勇気をふるってその本は面白いのかと話しかけてみました。彼は大変面白いと、ファン・ルルフォというメキシコ人作家の小説『ペドロ・パラモ』を読むことを勧めてくれました。早速、本屋で買って読んでみました。当時の私には難解でほとんど理解できませんでしたが、それをきっかけに、ラテンアメリカの文学について興味を抱き、短篇を読んだり、日本で翻訳された様々なラテンアメリカ作家の作品を読みました。特に『ペドロ・パラモ』は今でも大好きな作品の一つです。厳しい自然と社会のなかで生きる人間の苦悩や、生と死の世界が交差する物語に、読むたびに引き込まれます。

メキシコの大学でよく思い出す光景は、図書館等の建物に描かれた多数の壁画の他、構内の路上で地面や棚の中に並べて売られていた本のことです。大学公認の正規の商売なのか非正規なのかわかりませんが、大学内には露店の本屋がいたるところにありました。学生たちは本を手にとって、中身をぱらぱらと確認したり、立ち読みをして買っていました。20年以上前のことです。現在のようにネット販売も無く、本屋で買う新装の本は高価だったので、学生はそうした古本を利用していたのでしょう。露天本屋では、学生は一人あるいは友人同士で立ち寄り、店主と会話しながら本を選

んで買って行くのです。とても知的な風景に思えました。私も店主に訊いてメキシコ革命を題材にした革命小説なるものを購入し、ベンチや木陰で、フルーツジュースを飲みながら本を読みました。

その後、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロでは、大学付属の語学コースでポルトガル語を学びました。そして、その大学構内でも様々な場所で敷物や棚の中に並べられて本が売られている光景に出会いました。こうした光景は、今でもブラジルの大学では普通に目にすることができます。また、ブラジリアでは地下鉄の駅構内に本棚が設置されていました。絵本が大半でしたが、子供たちが好きに手に取って本を読めるのです。日本にも回し読みよの本棚が設置されている駅がありますよね。本屋や図書館だけでなく、屋外でも好きな本を自由に読めるという環境は素晴らしいことだと思います。

私が新入生の皆さんにお伝えしたいのは、「屋外で本を読むススメ」というわけではありません。もちろん、本をどこか屋外の気持ちの良い場所で日常的に読めたら、それは幸せなことですが、大学生活ではコミュニケーションをとることと、一人で考えることの双方をバランスよくとることを心掛けてほしいと思います。他者とのコミュニケーションは学びや関心の領域を広げる契機になりますし、一人で考えることは、創造力や思考力を深められます。読書から得た知識や考えを基にすると、友人や恋人との会話もずっと豊かなものになるでしょう。皆さんは、これから授業やサークル活動で、先生や友人等、今まで以上に多くの人と出会うことになると思います。大学を、人との関わりのなかで好奇心を広げ、経験や実践に繋げるチャレンジの場として積極的に活用すると良いと思います。

ところで、「ブラジル」と言えば、皆さんは「開放的」、「自由」という印象があると思いますが、ブラジル文学は、かつて政治的な検閲の下で自由な表現が抑制された時代を経験しています。授業のなかでは、そうした苦難の時代において、文学者は作品の中でどう表現し、工夫していたのかということにも触れ、皆さんと意見交換したいと思います。